

最晩年の足利尊氏

国立台湾大学日本語文学系助理教授

亀田俊和
かめだ としたか

拙著『観応の擾乱』(中央公論新社、2017

年)の刊行などによる昨今の南北朝～室町ブームのおかげで、室町幕府初代征夷大将軍、足利尊氏に対する興味関心が高まり、彼に関する知見も広まっているようである。しかし、息子直冬と死闘を演じた1355(文和4)年春の文和東寺合戦以降における尊氏の動向については、あまり知られていないと思う。

当時の幕府は、原則として尊氏の嫡子義詮が全権を行使し、尊氏は配下の武士に対する恩賞充行のみを行う体制であった。その恩賞充行権も1356(延文元)年ごろには義詮へ移動し、義詮は事実上の二代將軍としての活動を開始する。1357(延文2)年ごろからは尊氏の健康状態も悪化した模様で、たびたび祈祷が行われた。

それでは尊氏は、完全に隠居したのであるうか。否。最晩年の尊氏が熱意をもって取り組んだのが、九州遠征計画である。当時の九州は、南朝の征西將軍宮懐良親王の勢力が猛威をふるっていた。

九州遠征の構想は1355(文和4)年冬ごろからあったようだが、本格化したのは1358(延文3)年である。同年2月13日には、翌月ついに尊氏が出陣するというニュースが京都を駆け巡った。しかし、3月8日に予定されていた出発は21日に延期された。さらに10日、義詮が尊氏を必死で説得し、遠征は中止された(以上、『愚管記』延文3年2月13日・3月8日・10日条)。そして尊氏は出陣を果たせないまま、4月30日に死去したのである。

尊氏が、死の病を押してまで懐良との対決に熱

時の調べ
Essay

意を燃やしたのはなぜであろうか。後醍醐天皇との戦いを極度に嫌がり、幕府が発足した後も政務の大半を弟の直義に押しつけたかつての尊氏とは、まるで対照的な姿である。

ここで当時の全国情勢を俯瞰すると、東北地方は斯波氏^{しば}が奥州探題として統治していた。関東地方は、尊氏の子基氏^{もとむし}が鎌倉公方として君臨していた。列島中央部は、前述のとおり義詮が全権をふるっていた。つまり、山陰地方の山名氏など一部を除けば、幕府は日本列島の大半を掌握してい

た。九州を制圧する懐良は、いわば天下統一にかけた最後の関門だったのである。

尊氏にとって九州遠征とは、ある意味で人生の総決算だった気がする。懐良を打倒して全国を統一し、幕府をより安定した状態で息子の義詮に譲りたい。そんな親心が垣間見える。

だが私には、尊氏は勝利よりもむしろ敗北を願っていたように思えてならない。彼は成り行き上仕方なかったとはいえ、敬愛する主君の後醍醐に反逆した自分を最後まで許せなかったのではないだろうか。

『源威集』によれば、文和東寺合戦の際、尊氏は目立つ衣装で高矢倉に登って酒を飲み、直冬軍の標的となったという。死を恐れない尊氏の態度に感激した味方の奮戦によって尊氏は勝利したわけだが、実は尊氏はそこで射殺されたとしても、それはそれでかまわなかったのではないかと思う。

後醍醐の子息である懐良に討ち取られれば、後醍醐に対する何よりの罪滅ぼしになるだろう。この想像が正しいとすれば、自分の死に場所を戦場に求め続けた尊氏は、やはり骨の髄から征夷大将軍だったのである。



足利尊氏像



略歴
1973年秋田県生まれ。2006年京都大学博士(文学)。2017年より国立台湾大学日本語文学系助理教授。南北朝期室町幕府の政治史・制度史を中心に研究している。主な著書に『南朝の真実』(吉川弘文館、2014年)、『観応の擾乱』(中央公論新社、2017年)等。